
+Laas+

乃亞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

+L a a s +

【Nコード】

N 2 2 7 1 B

【作者名】

乃亞

【あらすじ】

キリクと仲間達には不思議な能力があった。その能力を活かすべく、依頼を受けその報酬で生活をしていた。そこへ一通の依頼の手紙が届いた。

＋プロローグ＋（前書き）

ファンタジー描くのは初めてなんで 下手ですがよろしくです！

＋プロローグ＋

何かが焼け焦げた臭いが 辺りに立ち込めている。今は火が消えた後らしい。

何か黒焦げのモノが転がっている。元は人間だったのだろうか。死臭が酷い。

「……っ……」

一人だけがゆっくりと起き上がった。

右目と右腕には 赤黒い血が べったりとついている。苦痛に顔を歪めながら、目の前に落ちている武器を拾おうとするが、体が言うことを利かないらしく、小さく舌うちをした。

「…幸運な奴だな。生き残ったのは貴様だけだぞ。私の焼き加減が足りなかったか?？」

声の主は 女だった。

少なくとも外見はそう見えるが…

女は 男の方に向かって 余裕の表情でゆっくりと歩いてきた。そこらに転がる 黒焦げの死体を平気で踏み潰し、一步一步 近付いて行く。

『ヤバイ!』

頭が必死に逃げろと言っているのに 体が動かない。

「く…そっ!」

女が 不気味な薄笑いを浮かべた。

「苦しいか?? 仲間の所に逝きたいか?? 今逝かせてやるよ。また炎がいいか? それとも首を斬ってやろうか。そうだ、最後に私の名前を教えてやろう…」

遂に女は 男の目の前まで来た。

「くそ……っは……り……シア……」

男はそこで気を失ってしまった。

なぜこうなった??

そうだ…手紙だ。

事の始まりは一通の手紙だった…。

十前十（前書き）

いきなり意味不明な所から始まるので 読みにくいかもしれません
が：最後まで読んでいただければ幸いです。

十前十

これは主人公、キリク達の 手紙が届く前の話である。

夜。

古びた神社の中から うめき声が聞こえてくる。

神社の広間のような所には、2人の男と1人の女、老婆、そして…その4人の前には 人間とかけ離れた“何か”がいた。

ソレは ゆっくりと大きな音をたてて床に倒れた。外傷がひどく、色んな箇所から血が溢れ出ている。

が、息絶えてはいない。微かに呼吸をしていた。苦痛にうめくソレは 蛙のような姿をしているが、普通より数十倍も大きい。

「なんだあ…依頼人が言ってたより全然弱いなあー」

ひょろっとした背の男が、のんびりとした口調で言った。髪は天パで肩位の長さ。目は垂れている。見た目も中身もへにゃんとしているが、戦い慣れしている。長い棒のようなものを武器として持っている。

この男が物語の主人公 キリクである。

「うおーい、ばあさーん いつものヤツいつものヤツ。」

キリクが暗闇に向かって叫ぶ。

返事がない。

「ばあさーん！聞こえてないのー？」

やはり返事はない。

すると隣にいた キリクより背の高い、短髪の逞しい感じの男がキリクの声を遮った。

「もういい。どうせまた瞑想してるんだらうよ」

この男の名は ハンス。手には大きなハンマーの様なものが握られている。ハンスは力が強く、体が丈夫だ。一言で言えば強い。情けない弱点もあるが：

キリクが信用する人間の一人だ。

「ああそっか。本人曰く、瞑想しなきゃアレ出来ないらしいしな。仕方ない：さっさと終わらせたいし、リシアがやってくれよ」

キリクが困った笑顔を見せると、リシアと呼ばれた細身の女が 呆れ顔で溜め息をついた。両手で忍者刀のようなものを 器用にくるくる回している。

「こうゆう弱いのは魂も弱いから霊になっても“こっち”にとどまれない。わざわざ逝かせなくてもいいでしょ。疲れるし。」

背中の半分位の長髪を美しくなびかせている。

まあ美人だが、少し冷めた性格だ。
だがリシアも信用出来る人間だ。

キリクが相変わらずのんびりと言う。

「ンぢゃあ任務完了でいっつかあ。」

「…ばあさんはどうする?？」

ハンスに言われて、少し考えたが あ の ば あ さん は 大 分 し ぶ と い し …

「まあ一人で帰って来れるっしょ☆帰ろー」

と、キリクが後ろを向いたその時、 蛙のバケモノが低い鳴き声を
一層大きくして起き上がり、キリクの方に向き直った。

「うわあ!! しぶといなあー」

キリクが急いで武器を構えなおした瞬間…

「まてえーい!!」

しゃがれた声が上から降ってきた。

十前十（後書き）

ちゃんと計画を立てて書いてるつもりなんですけど…どうもうまくいきません（泣）

十逝天十（前書き）

『逝天』という技（？）の説明が大半で、ストーリーはあまり進行していません（汗

十 逝天十

キリクが上を見た瞬間、そいつはキリクの顔を踏み台にして、綺麗に着地。

そして蛙のばけものを上から下までゆっくりと見る。

「ほーう、大分弱らせたようだが…まだ動いとるぞ。」

「ばあさんが遅いからだろ！早く帰りたいからさー：アレ！アレでさっさと終わらせてくれよッ。」

キリクが顔を抑えながら 呆れながら言うと、ばあさんはすでに魔力を右手に集中させていた。そして蛙のばけものの方に掌を向けながら言った。

「“アレ”ではない！“逝天”ぢゃ。」

『逝天』

ソレは 倒した敵を霊界へ導く行為だ。

弱いヤツは 魂も弱い。

魂が弱いと、自分の意思とは関係なく 霊界に引き寄せられ、逝く

(成仏する) ことが出来る。

だが、強いヤツは魂も強い。魂が強いと 霊界の力に抵抗し、逝かずにこっちにとどまってしまう事が多い。強いヤツらはその強さで悪さや悪戯をし、最終的には心がなくなり、化け物になってしまう。そうになると、強制的に霊界に逝かせなければならない。

そのために『逝天』が必要なのだ。

ばあさんがそう言うのと、蛙のばけものが 光とともに ゆっくりと消えていった。

完全に消えると、ばあさんが ふーっと息をつく。

任務が終了した。

皆がばあさんの近くに寄ると、

「帰省」

とばあさんが一言発した。

景色全体が一気に歪み、次の瞬間には 宿のような建物の前に来ていた。

「ふー…やっと寝れるなあ。」

キリクが 大きなあくびをすると、後ろのしげみが がさ…っと音をたてて動いた。

十逝天十（後書き）

なんか話の進行が遅い……。キリクとかの能力は、次の次の話くらいに分かると思われます。ここまで読んで下さってありがとうございます。のんびりしてますが、これからよろしくお願いします m

〔 m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2271b/>

+Laas+

2010年10月11日19時17分発行